ウチのＸｂｏｘ３６０

二等海士長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウチのＸｂｏｘ３６０

【Ｎコード】
Ｎ６９８９Ｌ

【作者名】
二等海士長

【あらすじ】
突っ剣呑な擬人化ＸＢＯＸ３６０と、変態チックな私の日常。
変態チックなのはあくまで私であって、日常は至ってノーマル。

1番：桃源郷へ……。（前書き）

妄想を垂れ流しにしました。１つにまとめて短編にしようかとも考えましたが、まとめきれずに断念。

1番：桃源郷へ……。

我が家のＸｂｏｘ３６０エリートは美人である。名前は【キサナ（Ｘａｎａ）】という。
流れる金髪、透き通るように白い肌と碧に輝く瞳。整った顔は幼さを残しているが、美人と言って差し支えない。将来は誰もが振り返るような美人になるだろう。今から楽しみである。
「なに人の事をジロジロ見てるのよ」
「いや、別に」
見惚れていたら睨まれた。
綺麗になって行くに従って、反比例するかの如く可愛い気が薄れて来ているのは、気のせいだと思いたい。

我が家のＸｂｏｘ３６０はエリートだ。
頭が良く、プライドも高い彼女のコンプレックスはズバリ、童顔な事だ。彼女は自分を大人っぽく見せるためにも、エリートの証しである黒服を好んで着用している。
「私は黒が好きなのよ。黒を纏うと気持ちが引き締まるもの」
とは、彼女の口癖だ。
私は黒一色も味気が無いと思い、ワンポイントとして何かアクセサリーを買ってやることにした。彼女がウチに来て約１年になるので、記念の意味でも丁度良い。

「エリートで黒服と言うと、ナチの親衛隊を思い出すなぁ」
ナチズムは嫌いだが、ナチの制服がカッコイイのは認めざるを得ない事実である。
とりあえず、ＳＳの襟章を買ってみた。

「何よ、ソレ」
「似合うかな～と、思い、付けてみた」
昔とった杵柄というヤツで、手早くタブルコートの襟に縫い付けてやったのだが……。
「なんかおかしいなぁ」
似合ってはいるのだが、違和感がある。
「ちょっと、いつまでこの格好をさせるつもり？」
「そう急くな」
夏のはしりにコートを着せられて暑がるＸｂｏｘ３６０をなだめつつ、違和感の正体を探る。程無くして、違和感の正体に気付いた。
「あぁー。わかった」
「何よ」
「ゲーム機で黒くてＳＳって言ったら、ペケ三郎って言うよりセガサターンじゃん。改名する？」
言った瞬間、凄まじいブロアーの作動音が響いた。
「サターンって……。アンタねぇ」
キサナが髪を逆立てて怒っている。
「待て待て待て！　話せばわかる！」
他意は無いのだ。ちゃんと話せばわかってもらえる……はず。
「本当にわざとじゃないんだ！　これはきっとアレだ、ホラ！　シュタインズ・ゲートの選択だ！」
「アンタにお似合いなのは、シュタインズ・ゲートじゃなくてオブリビオン・ゲートよ！」
キサナの細い腕がモノごっついアダプタを振り上げた。
「ギャース！」
そこで、意識が途絶えた。

夢を見た。懐かしい夢だった。夢の中で私は、文字の書かれた短

柵を前に唸っていた。Ｘｂｏｘ３６０に名前を付けようとして悩んでいたのだ。
「クリスタ……クリス、クリスティーナ……駄目だ、どれもありきたりだな」
「マスター。私はありきたりでも構いません」
まだ買ってきたばかりの頃の、大人しかった頃のキサナの記憶だ。
「俺は構うの。待ってろ、Ｘのつく素敵な名前を見付けてやるから」
「はい」
この時は結局、自分では考えつかなくて英語辞典を頼り、【Ｘａｎａｄｕ】という地名を見付けたのだ。
Ｘａｎａｄｕ、そもそもは元の上都の事を指していたが、今は桃源郷を意味するという。

1番：桃源郷へ……。（後書き）

今回は、知り合いから『たまには軍とか自Ａ隊から離れれば』と、言われていたのだけど・・・・・・。

知り合い
「いやさ、擬人化ってどうよ。しかもＸＢＯＸ３６０って」

作者
「良いじゃんか。ギガロマニアックスを炸裂させられるハードだぜ」

知り合い
「いっそさー、ＤＸＢＯＸ７２０を擬人化すりゃええのに」

作者
「ブトゥームかよ」

知り合い
「空飛ぶ電波からは、『てっきりアルペジオをネタにするかと思ってました』って言われたろ」

作者
「似た様な事は、以前やったし。それにアワーズならアルペジオよりもヒラコーがネタにしやすいだろ。【以下略。】とか」
それ、アワーズの連載ちゃう。ゲーマガや……。

知り合い
「しかも、【以下略。】終わったじゃねぇか」
ま、そんな事もあるさ。　ちなみに、知り合いは『こんなキャラ

クター、俺なら【クサンティッペ】と名付けるよ』と、言いました。
調べてみると
【クサンティッペ／ｘａｎｔｈｉｐｐｅ】――ソクラテスの妻。一般では『口うるさい女』『ガミガミ女』、との事。
成程ね。

2番：3年目の浮気

ある日の事。
平和にニンテンドーＤＳで【ラブプラス】をプレイしていた私の背後に、キサナが忍び寄った。

「アンタ、何やってるのよ」
「見て判らないか？」
ノンビリ過ごしていて不意を討たれたはずの私が平然と訊き返すと、キサナは不満そうな顔をした。

「スカした美少女なんか要らないんじゃなかったの？　恋人はＡＦ９９じゃなかったの？」
「何処の海兵隊だよ」
唐突なキサナのセリフに、ズッこけながら私はうめいた。
そういえば、キサナを使ってフルメタル・ジャケットを再生した事があったが、あんまり変な知識を身に付けて欲しくは無いものだ。
……ちなみにＡＦ９９とは、Ｘｂｏｘ３６０のゲーム、【地球防衛軍３】に登場するアサルトライフルである。
私はニンテンドーＤＳを閉じ、キサナに向き直る。
「いいか、ペケ三郎。今から俺が名言を言うから、良く聞いておけ」
「ペケ三郎って言うな！　……で？」
キサナの促す視線を受け、私は『名言』を吐く。
「恋人がゲーム内にいるのではない、恋人そのものがゲームなのだ」
フッ。決まった。
私は呆けているキサナを視界から外し、ニンテンドーＤＳを開いた。
しかし、タッチペンを握った手を、ハッシと掴まれてしまう。
「なんね？」

今日のキサナは一体どうしたものか、常に無く絡んでくる。
キサナは私の困惑には気付かず、顔をズイと近付けた。
「私がアンタに言いたい事と訊きたい事が１つずつあるわ」
彼女は掴んでいた私の手を解放すると、そのまま私の顔面に人指し指を突き立てた。
「エイブラムス大将を玩具にするな！」
誰もそんな事してねぇよ、というツッコミを入れる前に、キサナが“訊きたい事”とやらを続けた。
「でさ、そのゲームの何が面白いのよ？　見た感じ、同じ事の繰り返しじゃない」
「それは酷い誤解だ。いや、むしろ偏見だ」
既にエイブラムス大将の事など頭の片隅に追いやられ、私はラブプラスの素晴らしさを説明し始めた。
「このゲームは何が素晴らしいって、恋人同士のコミュニケーションが体験出来るって事だ。しかも、ポリゴンキャラが動きまくるから、色々と参考になる」
「何の参考よ……」
「細かい事は気にするな。お前はチェキストか？」
私は『コホン』と、咳払いを一つした。
「まあ、細かい所で気に入る要素も有るのだが。俺的には全体に漂う【みつめてナイト】臭さがたまらん」
おっと、ついつい饒舌になってしまったと思い、私はキサナの顔を窺った。キサナは何やら考え混んでいる。
「【みつめてナイト】というゲームは聞いた事がないわ」
どうやら、キサナは自分の知らないゲームが話に出てきたのが気に食わないらしい。
「まあ、知らなくて当然だ。何せ発売は１９９８年の、対応機種はプレステだからな」
「なっ……！」

流石に十何年前のゲームはデータベースに入っていなかったのか、キサナは沈黙した。
「いや～、しかし１９９８年か。あの頃はニンテンドー６４でゴエモンばっかりやってたな。まあ、この間のゴールデンウィークで帰省した時も６４を引っ張り出してやってたけどね」
「ゴールデンウィーク……？」
暫しうつ向いて沈黙していたキサナだが、私の言葉に反応し、顔を上げた。その目はいつもの緑ではなく、煉獄の炎の様に赤々と輝いている。

「あ、アンタ、ゴールデンウィークは実家に帰って病後の父の様子を見るって言ってたのに！　それが何でロクヨンなんかと遊んでるのよ！？」
「いや、俺は６４で遊んでたのであって……ウワ！」
キサナは私の肩を掴むと、前後にガックンガックン揺さぶってまくしたてた。
「ねぇ、何で？　何でロクヨンなのよ。あんな２０世紀の遺物が。７．６２ミリの何がそんなに良いの？　何でＸＭを使わないの……？」
言いながら、キサナの手は、私の肩から首へと移動している。
「お前、ソレ違う六四が混じってる！」
キサナの瞳はいよいよ赤く染まり、視線もどちらを向いているのか分からなくなってきた。これは不味い。完璧に故障の合図だ。
「ええいっ、こうなったら！」
別に縛られていなかったし、毒を盛られたわけでもないので自由に動く両手で、私はキサナの瞼を閉じ、瞼の上から軽く目を圧した。主電源のＯＦＦスイッチである。
「ひゃんっ……！」
短い悲鳴をあげ、電源が切れたキサナはすぐに活動を停止した。

私はサービスセンターに電話すると、どうにかこうにかキサナを車に乗せ、近くのゲームショップへと運びこんだ。
「やぁ、今日はどうしたんだい？」
「×三郎が壊れちゃいまして……」
「ナニ！？　壊れる程激しくシタのか。若いなぁ」
店員と二言三言噛み合わない挨拶を交わし、キサナを預ける。
「どれくらいで直りますか？」
「う～ん、そうだな」　店員は腕組をしてキサナを観察していたが、暫くして結論を言った。
「バックオン・エスティメイト……オルソー５日後、かな」
店員は、キサナをぺたぺたと撫で回し
「外見でも分かる故障ならともかく、電装系はメーカー修理だね」
と、言った。
「５日ですか」
それは、５日間はＸｂｏｘでゲームが出来ない事を意味する。
Ｘｂｏｘの無い５日間に、果たして私は耐えられるのだろうか。

2番：3年目の浮気（後書き）

作者
「今回は『六四式小銃ってスゲェ』って話だなや」

知り合い改め空士
「この前撃ったけど、命中率は良いな。撃発不良にはビビったけど」

作者
「空砲ならともかく、実弾で撃発不良は珍しいな。大抵は排キョウ不良なのに」

空士
「１９６４年採用って、時間的に２１世紀の現在よりも第２次大戦に近いんだぜ。しかも、どノーマルで使ってるってのが……」

二等
「……で、だ。話を総合すると、『ゴエモンのＢＧＭは神』って事になるな」

空士
「言ってる事は正しいが、話の結論としてはおかしいぞ？」

3番：グリーングリーン

夢を見た。
横須賀中央のＭＯＲＥ'ｓでＸｂｏｘ３６０を買った時の夢だ。
その時はコアシステムを買い、ソフトは地球防衛軍３しかなかった。暫くして、アイドルマスターとゴッドファーザーが加わり、やがてオブリビオンが加わる事になる。
そのコアシステムも、今となっては稼働していない。何せ、画像が出力されないのだから……。

目覚めるとまだ薄暗かった。時計を見ると朝の５時で、外は霞みがかっている。
充電していた携帯電話とエアガンのバッテリーを充電器から外すと、朝食まで布団の中でボンヤリと過ごした。
「やる事が無いな……」　暇である。ゲームをする事が出来ないだけで、やる事が無い。
仕方ないので小説でも読もうかと思ったが、昨日の午後から剣客商売を一気に読んでしまったせいか血がたぎる。
木刀や模造刀を振り回すにしても、屋内では周りに迷惑であり、外でやれば即座に通報されてしまうだろう。
かと言って、他の本を読むのも危険だ。時間の経つのも忘れてしまい、仕事に遅れてしまう。
「池波正太郎も時間泥棒だな。隠し剣とか用心棒とか、読み始めると止まらんからな……」
いつもならここで『作者が違う』と、ツッコミが入るのだが、今日はツッコミを入れるものがいなくて調子が狂う。

「……散歩にでも行こう」
あまりにやる事が無さすぎて、私は朝靄の中へ歩き出した。
靄は風に流されゆっくりと晴れつつあった。梅雨のはしり、新緑の季節とあって、かすかに見える山々は美しい緑に輝いている。
何とは無しに、キサナの事を思い浮かべる。彼女には新緑と深緑が良く似合う、等と思う。
「じきに夏が来るなぁ」
私は暑い夏を如何にして乗り切ろうかと考えながら、日が照り始めた道を戻って行った。

その後、1週間程でキサナは戻って来た。修理は完璧で、私の平和な日常が戻ってきたのだ。

ある日。
夏の暑さに負けじと、私は部屋のクーラーをガンガンつけ、肌寒いくらいに冷房を効かせていた。
冷房が効きすぎて寒いのでタオルケットを羽織り、カイロ代わりにキサナを抱きかかえるようにしてゲームに興じる。
キサナは私とくっついている事にも構わずに雑誌を読んでいたが、私があまりに寒そうに見えたからか声をかけてきた。
「アンタさあ、そんなに寒いなら冷房切ったら？」
「ふむ。それは合理的で正しい理論だ。……だが断る」
「何でよ」
理解出来ない。と、顔で語るキサナに、私はクツクツと笑いながら答える。
「この“いつでも寝れる態勢”を維持するのが重要なのだ。即時待

機なのだ。指揮はＷＯＣに移行しているのだ。解るかね？」
「言ってる意味がわからないわ」
キサナは顔をしかめると、雑誌を眺める作業に戻った。
ふと、その雑誌の記事が目に入る。デカデカとＰＳ３の記事が掲載されていた。
「ってお前、ソレって電プレじゃん」
「そうよ」
あっさり返すキサナに、てっきりファ三〇×ｂｏｘ３６０だと思っていた私は驚いた。
キサナも少し成長しているという事だろうか。
それにしても……。
「ＰＳ３か。どれ」
キサナの手元を覗き込んで記事を見てみる。何の変哲もない記事である。
「どうかしたの？」
キサナはそんな私を見上げる様にして話かける。私は暫く記事を眺めていたが、ふと思いついた。
「ＰＳ３って、真夏の砂浜が似合いそうじゃないか」
なんとなく思いついて言ってみたのだが、私の言葉を聞いた途端、キサナはそっぽをむいてしまった。
「スケベ」
キサナはそう言って私の腕の間からスルリと立ち上がり、窓際に寄りかかるようにして立った。　緑の山々（山頂のレーダーサイトが邪魔だけど）を背景に立つＸｂｏｘ３６０は、本当に美しいと思った。

3番：グリーングリーン（後書き）

作者
「今回のオチっつーか、豆知識をば」

【レーダーサイトの略号は『ＳＳ』】

空士
「……そんなにセガサターンが好きなのか？」

作者
「いや。そもそもセガサターン持って無いし」

空士
「そう言えば、ＸＢＯＸの擬人化なら、髪も緑にすれば良かったんじゃねぇの？」

作者
「それは無理。緑の髪は、ヤエちゃんクラスのキャラクターじゃないとダメだ」

空士
「ヤエちゃんって言ったら青ｏｒ黒髪だろ。公式では緑髪であっても、俺は青髪派だ」

作者

「妄想の申し子、二等はどう考える？」

二等
「若いな、貴様達。正解は『ヤエちゃんで有る限り、どちらでも良い』だ」

空士
「うっわ、ズル！」

作者
「いや待て待て。『緑の黒髪』という表現もあるし、ここはやはり緑だろ」

キサナ
「で、私はいつまで放置なのかしら」

作者
「んー。プラチナで侍道3が出るまでかな？」

空士
「スタープラチナがどうしたって？」

キサナ
「……（さっさと帰れ）。プラチナ・コレクションって、略すとPCになるのは、何か狙いがあるのかしら」

作者
「お前が分からないのに、我々が知ってる筈も無かろうて」

キサナ
「それもそうね。……ところで、後書きにオチってあるの？」

作者
「いや。無いよ」

拙作ですが、ここまで読んで下さったあなたに感謝します。
またドコかで御会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6989l/

ウチのＸｂｏｘ３６０

2010年10月8日14時50分発行